

シルヴィア・プラス『巨像』再考

高橋 美帆

A New Approach to Sylvia Plath's *The Colossus*

Miho TAKAHASHI

The Colossus is the first and last poetical publication that Sylvia Plath made in her lifetime. Since her death the rest of her works such as *Ariel*, *Crossing the Water*, *The Collected Poems*, and even her diary and letters had been edited and published by her husband, Ted Hughes. Considering 'Sylvia Plath' and its commercialism, only *The Colossus* could survive his 'cut and paste' homicide, remaining her original and her truth. This paper introduces to Japanese readers a new way of appreciating *The Colossus* with its Japanese translation.

はじめに

『巨像』(*The Colossus* 1960)はシルヴィア・プラス(Sylvia Plath: 1932-63)が生前に出版した唯一の詩集である。シルヴィアが30歳で自ら命を絶ったとき、彼女の遺稿はすべて、日記も書簡も何もかも、法律上はまだ夫であった詩人テッド・ヒューズ(Ted Hughes: 1930-98)が受け継いだ。それは1963年2月、テッドがシルヴィアと幼い二人の子供を棄てて愛人の元へ去って半年後のことだった。シルヴィアは愛人がテッドの子を妊娠した事実を知らされたようである。だが、当時の彼女の日記はテッドによって処分されてしまい、今となっては、なぜ彼女が死を選んだのかはわからない。シルヴィアの死後、自分と子供たちを含めた「遺族を守るため」に、日記の場合のように、テッドは彼女の手紙や個人的な記録を処分したり、遺稿に削除や改訂を加えたりしてきた。実際のところ、自分のプライバシーを守るのみならず、テッドは「シルヴィア・プラス」の商品価値を十分に理解し、手を加えてきたようである。詩集、短編小説などの遺稿がテッドの編集により出版され、そのうちのひとつである『エアリアル』(*Ariel* 1965)は高い評価を得て、シルヴィアの代表作となった。1981年には、テッドの編集した『詩集』(*Collected Poems*)がピューリッツァー賞を受賞し、彼女の名声を不朽のものにした。さらにテッドは自らの編集で、亡き妻の日記の一部を出版し、彼女が生前ペンネームを用いて出版した自伝的小説『ベル・ジャー』(*The Bell Jar* 1963)を「シルヴィア・

プラス」の名で出版しなおした。シルヴィアが母親に宛てた手紙の出版までも、彼は許可した。テッドは、シルヴィアの遺産を切り売りして生計を立てる遺族さながらであった。

一方、「シルヴィア・プラス」の商品化に伴い、彼女の生涯についてさまざまな伝記が出版され、「シルヴィア・プラスの神話」が築き上げられてきた。シルヴィアの著作権を管理するプラス・エステートは、彼女の著作物からの一切の引用等について、校閲を受ける法的義務を伝記作家に課している。多くの伝記作家たちが語っているように、ヒューズ一家、とりわけプラス・エステートの管理者であるテッドの姉オルウィンと、伝記作家たちとの間には、シルヴィアの「真実」をめぐる壮絶な戦いが繰り返されてきた。シルヴィアを実際を知る人々は、隠蔽されている真の彼女の姿について語りたかった。フェミニズム批評家たちは、死後もなお夫に抑圧される妻を解放しようと、シルヴィア擁護に奔走した。シルヴィアの読者はテッドの身勝手な編集を憎悪し、「本当の」シルヴィア・プラスを取り戻そうとしてきた。オルウィンは弟を守るため一切の渉外を担当し、批評家や伝記作家たちと戦った。テッド自身は沈黙を貫いたまま詩人として第一線で活躍しつづけ、ついには桂冠詩人の座に就いた。シルヴィアが亡くなって35年以上経った1998年になってようやく、死を予期していたテッドは、詩集『誕生日の手紙』(*Birthday Letters*)においてシルヴィアに語りかけた。結果的に遺作となったこの詩集において、テッドはシルヴィアの「真実」を自分なりに演出し総括し、彼女の「遺産」を使い尽くして、同年末

に亡くなった。

このような「シルヴィア・プラス」の商品化という側面から彼女の作品に現在与えられている評価へと至った経緯を考えると、シルヴィアが自分自身で手がけて出版した『巨像』こそ、唯一無傷の作品集といえるだろう。詩的に未熟な面も含めて、28歳のシルヴィアの等身大の姿が、詩人の「真実」が、そこに映し出されている。技巧的な面を細かく見ていけば、当時共に暮らしていたテッドの影響は否めないかもしれない。だが、彼女特有の母音韻、母音の反復の技巧が豊富に見られることは、のちの作品との関連において、とりわけ注目に値すると思われる。しかしながら、シルヴィアの作品全体の中で、この初期詩集の占める位置は大きくはない。さまざまなシルヴィアの詩集の翻訳が進んでいる日本においても、この『巨像』にはまだ完訳が見られない。

これまで『巨像』で問題にされてきたのは、シルヴィアが信奉する二人の男性——彼女が8歳の時に亡くなった父オットー、そしてその父の代償、シルヴィアの言によれば父が夫となるため姿を変えて現れた男性テッド——この二人の「巨像」と作者との関係である。シルヴィアの作品は、これまで彼女の実人生との関わりで語られてきた。確かに、テッドの解説、すなわちどういう状況で作られたものなのかという背景がわからなければ、理解しがたい作品もある。今回取り上げた作品では、たとえば「ウイジャ」などが、典型的な例であろう。この作品については、テッドの『誕生日の手紙』にも同題の作品が見られ、死を目前にしたテッドはこの「返歌」において、亡き妻とのダイアログを成そうとしている。

本稿は、以上の事情に鑑みて、『巨像』の再評価と完訳の補助を目指すものである。シルヴィアが自分で編んだ唯一の作品集であるからこそ、作品の自律性を信じ、むしろ伝記的事実からの作品の解放を、翻訳という形を通じて試みてみたい。紙面の都合上、初邦訳の作品を含め、今回は12の詩篇を紹介し、新しい角度からシルヴィア・プラスの「真実」を照らし出してみたいと思う。

1. 大邸宅の庭

泉は涸れ 薔薇も枯れた。
死の香りが漂う。 おまえの誕生日が近づく。
小さな仏陀のように 梨はまるまると肥える。
青い霧が湖を浚っている。

おまえは魚の時代を経て

ひとりよがりの豚たちの幾世紀を通過する——

頭 爪先 手の指は
影から姿を現す。 歴史は

この壊れた柱の装飾に
この柱頭のアカンサスの葉飾りに
滋養を与える カラスは衣を調える。
おまえは白いヘザー 蜂の羽を受け継ぐ。

二つの自殺 一家の狼たち
うつろな時間。 硬い星たちは
すでに黄色く天に輝く。
クモは自分の糸に乗って

湖を渡る。 虫たちは
いつもの住まいを立ち退く。
小鳥たちは集まる 集まる
贈り物を携えて 困難な誕生の場へと。

2. 目の中の塵

真昼のまったき光の中で 私は眺めていた
スズカケの緑の野を背にして 馬たちが
首を曲げ 鬣をなびかせ 尾をたなびかせているのを。
太陽は 屋根の重なりの上に突き出した
教会の白い 幾本もの尖塔に打ちつけ
馬たち 空の雲 木々の葉叢を捉えられていた。

それらは海の葦のように左にたなびき流れつつも
しっかりと根を張っていた。
そのとき何かの破片が飛び入り 私の目を突いた。
針が目を蒙くした。 そして私は見ていた
熱い雨の中さまざまな形が溶け合っていく姿を。
変容する緑の中で 姿をゆがめた馬たちは

奇妙な双瘤駱駝あるいは一角獣のよう。
ぼやけたモノクロ写真のすみで草を食む
オアシスに集う獣たち——これならまだよかった。
いま目に入った小さな粒は私の瞼を擦って燃える。
その赤い燃え殻のまわりを 私自身が
馬が 惑星が 尖塔が ぐるぐるまわる。

涙を流しても 洗顔コップで目を洗っても
その塵を落とすことはできない。
塵は目を突き刺し 一週間こびりついたらまた。

ただ現在の肉への搔痒を湛え
過去も未来も 私の目には見えない。
私は自分がオイディプスになった夢を見る。

取り戻したいのは 以前の私
ベッド以前の私 ナイフ以前の私
ブローチ留めと膏薬で
括弧の中に入れられてしまう前の私。
風の中でしなやかに流れる馬たち
心から消えてしまったひとつの場所 ひとつの時。

3. 巨 像

あなたを元の姿のとおり組み立てるなんて
私には決してできない
かけらをよせ集め 接着剤でくっつけ
きれいに継ぎ合わせて。
騾馬のヒヒーン 豚のブウブウ
雌鶏のみだらなコッコッ という鳴き声が
あなたの大きな唇から生まれてくる。
農家の内庭よりも騒がしい。

おそらくあなたは自分を神託だと
死者たちの あるいは神かなにかの 代弁者だと
思っているのだろう。
もう三十年間も私は
あなたの咽喉からずっと泥を浚渫してきた。
それなのに 少しも賢くなれない。

接着剤の壺と 消毒液の桶を手にし
小さなはしごを上って 喪服を着た蟻のように
雑草の生えたあなたの広い額のうえを 私は這い回る
その巨大な頭蓋骨の欠片をつなげて修繕し
はげて白くなったその両目の塚を洗うために。

『オステレイア』から出てきた青い空が
私たちの頭上で弓のように曲がる。
おお 父よ まったく自分だけで
あなたは古代ローマの広場のように
歴史的意義を持っている。
黒い糸杉の丘のうえで 私は弁当を開ける。
あなたの溝ひだのついた骨と
アカンサス飾りのある髪は

昔のように無秩序に 水平線にまで撒き散らされている。

このような廢墟を創造するには
稲妻や雷だけでは足りないことだろう。
夜な夜な私は 風を避けて あなたの左耳の
角のような渦巻きの中にしゃがみこみ
赤い星と深紫の星を数える。
太陽は 柱のようなあなたの舌の下から昇る。
私の時間は 影と結ばれる。
船着場のなにもない小石の上に
竜骨のキーキーという音を聞こうと 耳を傾けることも
もうない。

4. ローレライ

溺れるような夜ではない。
満ちた月 河は静かに流れる
穏やかな鏡の輝きの下で黒く。

立ち上る青い川霧が ひとつまたひとつと
薄い幕を 漁網のように落とす
漁師たちは眠っているけれど。

重々しい城の櫓は いくつか
川面の鏡に映り 一面の静寂。
でも あの影たちが

私の方へと浮き上がってきて 静けさの面を乱す。
奈落から この者たちは這い上がる
その手足は 豊かですっきりと重く

髪は大理石に彫られたものよりも重い。
この者たちは歌う
ありえないほど満ち足りて透んだ世界を。

姉妹よ お前たちの歌は
人間の渦巻く耳で聞くには
重すぎる荷を負っている

安定した統治者のもつとで
舵のうまく取れている この国では。
ハーモニーを使って混乱させ

世俗の秩序を超えて
お前たちは歌声で包囲する。
悪夢の傾斜した暗礁に宿り

確かな避泊港を 約束する。
昼間は 夢と現実の境界から
高い出窓から

多声楽曲を歌う。 気のふれんばかりの
お前たちの歌よりもひどいのは
お前たちの沈黙。 お前たちの

氷の心の呼び声の源には——
酩酊の巨大な深み。
おお 河よ 私に見えるのは

お前の銀の流れの中深く
あの素晴らしい平和の女神たちが漂っている姿。
石よ 石よ 私をそこまで連れて行ってくれ。

5. すべてのいとしい死者たち

ケンブリッジにある考古学博物館には四世紀の石棺がある。中には女性とハツカネズミとトガリネズミの骸骨が入っている。女性のくるぶしは少しかじられていた。

背中を固い棒にして
硬い石の笑いに歯を見せて
博物館の陳列箱の骨董婦人は横たわる
安っぽい装飾品のように干からびた
ハツカネズミとトガリネズミを仲間にして。
このネズミたちは彼女のくるぶしを食べて
一日だけ生きながらえたのだ。

この三つのものたち 覆いを解かれて今
食らい食らわるあの赤裸の戯れの
乾いた証人となる。
星たちがわれわれの穀物を骨ばった顔になるまで
一粒ずつ砕いているのが もし耳に入らないなら
この戯れを見て見ぬふりをするだろうに。

なんとしっかりと必死にわれわれを掴むのだろう
このしつこい死人たち！
この婦人は私の血縁ではない
でも 身内なのだ。 それを証するために
彼女は私の血を吸って
骨の髄まできれいさっぱり吸い尽くしてしまうだろう。
彼女の頭を

水銀の張ってあるガラスから見えるあの頭を
今思い浮かべると
母さん 祖母さん 曾祖母さんが
手を伸ばして私を抱きしめ 捕らえこもうとする。
養魚池の水面に ほんやりと姿が浮かぶ
オレンジ色の鴨の足をして 髪を振り乱して
正気を失くした父さんが 沈んだ池——

昔死んでしまいたいといい人たち
でも みんなすぐに帰ってくる
すぐに。 通夜であろうが 結婚式であろうが
お産のときでも 家族でバーベキューする時でも。
どんな感触 味 舌触りも
あの無法者たちが家に馳せ戻るきっかけとなる

そして聖域にも。 時計がチクタクいう間に
彼らは肘掛け椅子を占領する

ついにわれわれが出かけるまで。
われわれ人間は それぞれ髑髏印をつけたガリヴァー
幽霊に謎をかけられ
幽霊に追い詰められて 横たわろうと出かけていく
揺りかごの揺れに合わせて 根を生やししながら。

6. マッシュルーム

一晩中
白い姿で 慎重に
とても静かに

私たちの足指 鼻は
肥沃な黒土をつかみ
空気をとらえる。

誰も私たちを見ないし
止めないし 裏切らない。
小さな粒は場所を空ける。

柔らかな拳が強情に
針のような葉を持ち上げ
葉の寝具を

舗道までも持ち上げる。
私たちの金槌 破城槌は
耳もなく 目もなく

完璧に声もなく
割れ目を拡げ
その穴を肩で突いて押し分ける。私たちは

水を常食とし
隠れて見えないパンくずを食べ
やわらかい物腰で 要求するものは

ほとんどなく なにも求めない。
こんなに大勢の私たち！
こんなに数が多い！

私たちは棚 私たちは
テーブル 私たちはおとなしい
私たちは食べられる

思わず肘で突いたり
押し合い押し合いしたりする。
私たちキノコ族は繁殖する。

朝までに私たちは
大地を受け継ぐことになろう。
足は今 戸口の中にある。

7. ほしい ほしい

お口を開けた 赤ちゃんの神様。
巨大で禿げの でも赤ん坊の顔した神様が
母さんのおっぱい求めて 泣きわめきました。
乾いた火山がいくつも割けて 火を噴いて

乳をもらえない唇が 砂ですりむけます。
つぎに神様は 父さんの血を求めて泣きわめきます。
父さんは蜂や狼や鮫の仕事を定め
クロカツオドリの嘴まで工作したのです。

乾いた目をした この頑固な大家長が
手下の男を骨と皮から立ち上げたのです。
メッキした針金の冠に 針をつけ
血のしたたる薔薇の茎に 棘をつけたのです。

8. 幽霊の暇乞い

さあ入れ 肌寒い人気のない土地へ
時は朝の五時頃。それは色のない虚ろの場所
ここで目覚めかけの頭は
襤褸になってしまった夜の宿命を厄介払いする。
硫黄の匂いに満ちた夢の風景
月に憑かれた晦い語呂合わせ。
夢の中で あれほど深い意味を帯びていたもの。

目覚めかけの頭は レディ・メイドの作品に
向き合う準備を整える
椅子と 書斎机と 寝癖のついたシーツ。
ここは消えゆく幽かなる者たちの王国
なにか言いたげな幽霊が 細い脚で立ったまま
あれあれ洗濯物の山に変わり果て 挙げた手は

丁寧に折られたシーツの束
さよならの合図を送っている。
二つの世界 まったく両立不可能な
二つの時間モードの接ぎ目で
私たちの粗食にも似た日常思考の原料が
神の食卓の後光を帯びるのだ。
そして出発。

椅子と机は 目覚めた頭にはわからない
神の言葉の象形文字。
寝相のついたシーツも 失われた別の世界を語る手話
やせ細って空ろになるまでは
目覚めるだけで失う世界のことを語っている。

現世の視界の端 いちばん外側の縁をつたって
幽霊は去っていく 物言う襤褸を引きずって
高く手を上げ さよなら さよならと繰り返し
地球の岩だらけの胃袋に降りるのではなく
大気の薄くなるところに

向かっていく。 そこに何があるのか
それは神のみぞ知る。
そして感嘆符の先端が 空に印をつける
輝く人參のような 響きわたるオレンジ色
廃位された緑の円い点が
かたわらに吊り下げる 最初の点

それがエデンの出発点 新しい月のカーヴに隣り合う。

去れ 母と父の亡霊よ 私たちの亡霊よ
 そして夢に見た子供たちの亡霊よ
 私たちの起源と終焉を意味する
 あのシーツのなかの亡霊よ
 去れ ヒバリの国 色相環の夢の国へ

始原のアルファベットと牛たちの国へ。
 それは月を跳びこえてモー、またモーと鳴く牛
 いま君が旅に向かう あの身の引き締まる突端ほどにも
 新しい数々の月なのだ。
 こんにちは さようなら、ハロー グッドバイ。おお番人よ
 神を冒瀆する杯 夢見る頭蓋骨の番人よ。

9. ウィジャ

ウィジャは冷淡な神 黄泉の国の神
 暗黒の深淵から このガラス板へと立ち現れる。
 窓辺では あの生まれざる者たち 成されざる者たちが
 蛾のようにはかなげに青ざめて 集まってきては
 うらやましげな燐光を羽から放つ。
 朱色 金褐色 太陽の発するさまざまの色が
 石炭の火の中で輝いても 彼らを芯から慰めはしない。
 彼らの渇きは底知れず 紅く染まって甦ろうと願って
 熱い血を求める暗闇に 劣らぬほど深い。
 ガラスの口は 私の人差し指から熱い血を吸う。
 この太古の神は そのお返しに
 お告げをぼつぼつと語る。

この太古の神も 色あせた調子ではあるが
 黄金の詩を書き 荒地を彷徨い とりとめなく語る
 彼はあらゆる獣の墮落を公平に記録する者。
 時は流れ 散文の時代になり
 彼の語りの旋風は和らげられ
 彼の過度の情熱は緩やかに冷まされた。
 言葉はかつて イナゴのように 暗くなる大気を叩き
 穀物をかじりつくして 穂の軸を大騒ぎさせた。
 空はかつて青く 天の威信を示したが
 今は私たちの頭上でとけて ぼんやりと降りてきて
 塵で厚くなり 湿った土と一緒にいる。

神は 黄色の髪をした腐った女王を讃えて歌う。
 女王は 生娘の涙よりも塩辛い媚薬を持っている。
 あの淫らな死の女神
 従者の蛆虫たちは 年老いた神の骨に蝕んでいる。
 それでも彼は 女王の蜜を 熱い美酒を讃える。

私に見えるのは 硬い肌をした逞しい彼が
 鋤の刃が掘り起こす堅い小石を
 女王の愛の重要なしるしとして 解釈するさま。

彼は 神として よろよろしながらも 文字を綴る
 そこに告げられているのは
 ガブリエルの簡潔な予告ではなく
 かくも華やかな数々の愛の思い出。

10. 不安を与えるミューズたち

お母さん お母さん
 おそろしいほど無作法な叔母さんや
 目も当てられないほど不器量な従姉妹を
 私の洗礼式に呼ばないなんて
 考えの足りないことをしたから
 自分の代わりに彼女が このご婦人方をよこしたのよ。
 ほころびをかがった卵みたいな頭をして
 こっくん こっくん うなずいて
 私のベビーベッドの足元に 枕元に 左側にいる。

お母さん 勇敢な熊の
 ミックス・ブラックショートのお話を
 作らせたお母さん
 いつも いつも お母さんの魔女たちは
 ジンジャー・ブレッドに練りこまれ焼かれてた。
 お母さんは 魔女たちを見たのかしら？
 お母さんは おまじないをしてくれたのかしら？
 私のベッドで夜毎うなずくご婦人たちを追い払うように
 口もなく 目もなく 毛のない
 つぎはぎだらけの頭をしたご婦人たちを。

あのハリケーンの時
 お父さんの書斎の窓が十二枚
 シャボン玉みたいにふくらんで 破れかけた。 そのとき
 お母さんは 弟と私に
 クッキーとオヴァルティンを食べさせ
 私たち二人の合唱に入ってくれた。
 「雷さんが怒ってる ブーン ブーン ブーン
 雷さんが怒ってる こっちは気にしない！」
 でも あの婦人たちは 窓ガラスを破った。

女子生徒が爪先で踊り
 蛍のように閃光をちかちかさせ
 ツチボタルの歌を歌ったとき

私はきらきらしたドレスを着ながら
片足さえ上げられず 足取りが重かった。
私の惨めな思いを知っている名付け親の
影に寄り添って立っていた。あなたは 泣きに泣いた。
そして 影が伸びて 光は消えた。

お母さん 私をピアノのお稽古へ行かせて
私のアラベスクやトリルをほめたわね。
でもどの先生も 私の弾き方は
音階は弾けてもぎこちなく
いくら練習しても 私の耳は音痴で
そう 教えようがないって わかっていたのよ。
私は別のところで いつも教えてもらった
あなたに雇われていないミュージズたちに。

大好きなお母さん ある日目覚めて 私は見たのよ
お母さん あなたが真っ青な空に
私の頭上に浮かんでいるのを
緑の気球に乗って どこにも どこにも
見当たらないような
数え切れないほどの花と青い鳥に明るく飾られて。
でもこの小さな惑星は あなたが
「こっちへいらっしゃい！」と呼んだとき
シャボン玉のように 急にひょいと消えてしまった。
気づいたら いつも一緒にいる仲間と 向かい合ってた。

昼でも夜でも 枕元に 横に 足元で
ミュージズたちは石のガウンをまとい 寝ずの番をする
私の生まれた日のように うつろな顔をして。
明けもせず暮れもしない 沈みかけの太陽に
彼女たちの影が 長く伸びている。
そして これこそあなたが私に与えた王国
お母さん お母さん でも
私がいくらかめっ面をしても
この仲間を裏切ることにはならない。

11. ペルセポネーの二人姉妹

二人の娘。 一人は家の中
もう一人は家の外。
二人のあいだでは 日がな 影と光の二重奏が
奏でられる。

板張りの暗い部屋
一人めの娘が 計算機械で

問題を解いている。
カチカチと乾いた音が時を告げる
娘が合計を出すごとに。
こんな味気ない仕事に
やぶにらみの目がネズミのように走りまわり
娘の痩せた身体の芯は青ざめる。

大地のように陽に焼けて 二人めの娘は横たわる
カチカチいう音が明るい大気の中の花粉のように
金色に吹かれていくのを 聞いている。
ヒナゲシの花床のそばに微睡んで

娘は眺めている ヒナゲシの花弁
血からできた赤い絹の炎が
太陽の刃へと燃え開くのを。
そして この緑の祭壇で

娘はすすんで陽の花嫁となり
精を受けて みるみるうちに肥え育つ。
シバムギの床に誇らしげに身をたたえ
娘は王を産む。 どんなレモンにも負けなくらい

苦く黄ばんだもう一人。
ついに振れた生娘に終わった娘は
無駄にされた肉をたずさえ 墓場に向かう。
蛆虫たちを夫とし なお女に遠いまま。

12. 石たち

ここは人間が直される町。
私は大きなかなとこに横たわる。
平たく青い空の環は

人形の帽子のように飛び去った
その光から私が離れたとき。 私は
無関心の胃袋に 言葉なき食器棚へと入った。

すりこぎのような母親が私をすり減らした。
私は動かない小石になった。
腹部の石はおとなしく

頭部の石は 何物にも揺さぶられず 静かだった。
口の穴だけがピーピーと鋭い音を立てた
黙するものたちの石切り場で

しつこくせがむ蟋蟀のように。
この町の人たちはその音を聞いた。
彼らは 物言わぬばらばらの石ころを追い求め、

口の穴が そのありかを叫んでいた。
胎児のように酔いしれて
私は暗闇の乳房を吸う。

食物チューブが私を抱く。
 スポンジが私の苔癬をキスして拭う。
宝石工が鑿をふるって
一方の石の目をこじ開けようとする。

これは地獄の後の世界。 私には光が見える。
風が 耳の内の栓を抜く
年老いた苦労性の耳。

水は火打石のように固い唇を和らげ
日光は同じように壁に射す。
移植する医者たちは陽気で

ヤットコを熱し 精巧なハンマーを巻きあげる。
電流が電線を激しく揺り動かし
電圧が徐々に高められる。 腸線が私の裂け目を縫う。

ピンクの胴体を運び 職工が取り過ぎる。
倉庫は心臓であふれんばかり。
ここは修理部品の町。

布にくるめられた私の両脚と両腕は
 ゴムのように甘い匂いがする。
ここでは 頭でも どの手足でも 治療してもらえる。
金曜日にはいつも 小さな子供たちがやってくる

鉤と手を交換するために。
死者は他の人のために自分の目を遺す。
愛は 私の禿の看護師の制服。

愛は 私の呪いの骨と腱。
花瓶は 再び組み立てられ
逃げやすい薔薇の宿となる。

十本の指は死者たちのための鉢をかたどる。
修理されたところが痒い。 何もすることがない。
私は新品のようによくなるだろう。

結 び

今回取り上げた12の作品に共通して見られるのは、
霊や幻想といった現象を通して描かれる、シルヴィアの
心象風景である。彼女の作品で語られるこうした事象の
数々を、父の死や、母との確執や、夫との関係といった
具体的な事実にあまりにもしっかりと結び付けてしま
うと、シルヴィアが語ろうとしている、もうひとつの世
界の姿がぼやけてしまうのではないだろうか。テッドの
解説によると、シルヴィアは実際、ウィリアム・ブレイ
クのようなヴィジョンナリー（幻視者）であったらしい。
だが、幻視（ヴィジョン）の見える見えないに関わら
ず、あるとき正気と狂気との境界を超えてしまったシル
ヴィアにとって、幽霊の姿とは、彼女の狂気を映し出す
鏡に他ならなかった、といえよう。

シルヴィアがつながりを持つとしたのは、生ける者
というよりはむしろ死者たちであった。たとえば「すべ
てのいとしい死者たち」において、詩人は死んだ人たち
とつながりを持つとする。「ペルセポネーの二人姉妹」
で夜と昼がデュエットを奏でるように、シルヴィアの内
的世界に住む二姉妹には、光と闇のバランスが必要だっ
た。だが、精神的な安定は望んでも難しいことでもあっ
た。むしろ、シルヴィアには、降霊術占い盤の名前でも
ある「ウイジャ」や、ジョルジュ・デ・キリコの絵画に
ちなんだ「不安を与えるミュージズたち」のように、詩人
として、神のお告げを民に伝える巫女の役割のほうがふ
さわしい。

霊の世界だけではなく、エゴという深く強烈な内面世
界も、『巨像』には見られる。詩人の生身の姿が端的に現
れているのは、「ほしい ほしい」かもしれない。シルヴ
ィアはいうなれば「愛情乞食」で、逸話によると実際に
食欲も旺盛であったらしい。テッドに出逢って自分の子
供を持つまで、彼女は満たされることがなかった。自伝
的小説『ベル・ジャー』の主人公エスターは、常に不安
定な恋愛関係に振り回されている。彼女は、独占欲が強
く嫉妬深くせに、相手に好かれようと無理をする。一
方で、無理しない自分を受け入れてくれる二番手を必要
とする。シルヴィアの実人生においても、テッドと結婚
するまでは、複数の男性との不安定な関係が並行してい
た。相手に言いたくても言えないわがまま、自分勝手な
態度、それらを抑圧した彼女の叫びが、「ほしい ほし
い」にあらわれているように思われる。この詩のタイト
ルをみたとき、皆に気に入られようと優等生で生きてき
たシルヴィアの隠してきたエゴが、火山のマグマのよう
に噴出する瞬間が、瞬時に感じられた。シルヴィアの翻

訳には「ですます」調を使用された例はこれまでに見られないが、この作品の翻訳には、あえてそれを用い、告白詩という枠を破り、原文に漂う雰囲気醸し出そうと試みた。

以上、この翻訳および翻訳を通しての解釈が、シルヴィア・プラスの作品解釈および詩人の「真実」に、新たな一石を投じることになれば、幸いである。

参考文献

- Hughes, Ted. *Birthday Letters*. London: Faber, 1998.
- Plath, Sylvia.. *Ariel*. London: Faber, 1965; New York: Harper & Row. 1966.
- . *The Bell Jar*. London: Heinemann, 1963 (published under the pseudonym Victoria Lucas); republished London: Faber, 1966; New York,: Harper & Row, 1971.
- . *The Colossus and Other Poems..* London: Heinemann, 1960; New York: Knopf, 1962.
- . *The Collected Poems*, edited by Ted Hughes, London: Faber, 1981; New York: Harper & Row. 1981.
- . *The Journal of Sylvia Plath*, edited by Ted Hughes and Frances McCullough. New York: Dial Press, 1982; Ballantine Books, 1983.
- . *Letters Home by Sylvia Plath: Correspondence 1950-1963*, edited by Aurelia S. Plath. London: Faber, 1975; New York: Harper & Row, 1975.

